

【山梨県教育委員会教育長賞】 相手の立場に立って

韮崎市立 韮崎東中学校

三年 ^{かわばた}川端 ^{みう}美羽

普段から人権について考えている人はどのくらいいるのだろう。私は、人権が守られる生活があたり前で、人権について深く考えることはなかった。

しかし、去年からその考え方が変わってきた。きっかけは、新型コロナウイルスだ。感染が広がっていくうちに、次は自分になってしまうのではないかという不安を感じた。その一方で、日に日に増えていく感染者数を見て、「どうせ感染対策をしていなかったのだろう」という怒りもこみあげてきた。そしてその怒りは、自分の住んでいる地域に感染者が出た時にピークに達した。特に、ある女性が検査の結果を待たずに出歩き、陽性だったため感染を広げてしまったということに対して頭にきた。その人に直接怒りをぶつけたいと思った。しかし、ある団体は、その女性に対する発言を控えるようにと発表した。私は「やってはいけない行動をしたのだから、何て言われても仕方がないのではないか。」とその発表した内容が理解できなかった。

しばらくして、私の家族が体調を崩し、熱が出たことがあった。その時感じたのは、家族を心配する気持ちはあたり前だが、コロナウイルスではないかという不安だった。なぜ不安に思ったのか。それは治るのかという家族に対しての不安と、周りからどう思われるかという不安があったからだ。もし本当にコロナウイルスになってしまうと、身近な人も検査を受けなくてはならない。ニュースで報道されると知らない人達から責められ、根も葉もないことがネット上で飛び交うかもしれない。友人など身近な人からも変な目で見られるかもしれない。様々な不安を感じた。しかし考えてみると、これらのことは私もニュースを見てコロナウイルスにかかった人に対して思うことと同じだ。もしかすると、自分でも知らないうちにコロナウイルスにかかった人達を差別して見ていたのかもしれない。かかった人達は自分のせいでかかったとは限らない。どんなに注意していてもかかってしまうものである。そのように考えることができていなかったと気づいた。以前、コロナウイルスにかかった女性への発言を控えるようにと発表した対応は、女性に対する差別を防ぎ、女性のこれからを支援するためだったのだと今になって理解することができた。

コロナウイルスにかかった人への差別を防ぐ方法として、私の通う学校では、峡北児生連の「あいの輪」活動を実践している。その中の宣言の一つに、「わたしたちは、もしも感染してしまった方がいたとき、その方に寄り添い、優しい気持ちで、回復を祈り続けます。」というものがある。感染してしまった人にとって最も怖いこと、それは周囲からの視線だと気づいた今では、この活動の本当の意味がわかる。感染してしまった時、もしも周りから優しい言葉をかけられ、回復を祈ってくれている人がいると感じることができたら、どれほど心が軽くなるだろう。一人ぼっちで孤独と一緒に病気と戦うなんて、それだけで良くなる可能性をつぶしているのではないだろうか。回復したとしても、その時感じた孤独や不安は一生その人の心に残ってしまうかもしれない。だからこそ、感染しないことは第一だが、それと同じくらい周りの支えがコロナウイルスと向き合っていく上で必要だと思った。

コロナウイルスの感染拡大によって、今まで表に出ていなかった、私達の未知の物に対して恐れを抱く弱さが浮き彫りになってしまった。そして、その恐れから自分の身を守ろうと、感染した人達に対して差別的な態度につながってしまった。人はピンチの時ほど本性が出るというが、まさにその通りだ。そういう時こそ、自分の気持ちを他の人にぶつけるのではなく、相手の立場に立って考えることが大切だ。コロナウイルスは、いつ誰が感染してもおかしくはない。感染を防ぐにも限界がある。もし自分が感染してしまったら、きっと絶望して未来が不安になるだろう。多くの人が同じように感じるはずだ。その時、周りからの励ましや支えがどれだけ力になるか、想像できるはずだ。感染した人を差別して、傷つけるのではなく、優しく寄り添い、回復を祈る。その行動こそが、今の社会に求められていると思う。

私は、新型コロナウイルスの感染拡大をきっかけに、普段から自己的人権が守られていることはあたり前ではないと気づいた。ある日突然、人権を守っていた物が壊れてしまうかもしれない。自己的人権はもちろん、他の人の人権も守るためには、相手の立場になって考え、差別の考え方を改めることが大切だと思う。それには、相手に寄り添っていくことが欠かせない。そして、一人一人が行動することにより、社会全体の人権が守られていくと思う。